バカと色付き眼鏡と召喚獣

松竹梅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと色付き眼鏡と召喚獣

【Ｎコード】

Ｎ８３０４Ｘ

【作者名】

松竹梅

【あらすじ】

文月学園に通うサングラスをかけた主人公、鈴風松也（すずかぜしょうや）。観察処分者の吉井明久とは幼稚園からの姫路瑞希とは小学校からの幼なじみであり、姫路瑞希とは一年生の春休みから恋人同士となった。これはそんな彼と仲間達の青春学園コメディーである。

第一話（前書き）

はじめまして、作者の松竹梅です。

小説を書くのははじめてですが、暖かく見守って下さい。

第一話

校舎へと続く坂道。
桜の花が咲き乱れた並木道を
俺は全力で走っていた。
しかも人一人背負って、

「ハッ！ハッ！、たくっ！寝坊するなよ瑞希！」
「す、すみません！今日から新学期だと思うと緊張してしまって…」
「とにかく急ぐからな！」
オレ、鈴風松也は幼なじみ兼恋人である、姫路瑞希を背負い坂道を走っていた。
何故背負っているかって？

彼女は体力がないからだ。

「遅刻だぞ！鈴風！姫路！」

学校に着くと校門のところにひとりの教師がいた。

「おはようございます！西村先生、遅刻してすみません！」

「おはようございます！西村鉄人先生、今日も暑苦しいですね？」

「鈴風？今、名前を鉄人と呼ばなかったか？それに暑苦しいは余計だ！」

「気のせいですよ」

「……まあいい。ほら。」

鉄人は二通の封筒をそれぞれに渡した。

「二人とも惜しかったな…。俺が試験官ならなんとかしたんだが」

「き、気にしないで下さい。あれは私の不注意で…」

「そうだぜ、てっちゃんが落ち込むことないって」

「誰がてっちゃんだ！

まあいい、よし、急げ！ＨＲは始まっているぞ！」

「はいよ！いくぞ瑞希！」

「は、はい失礼します！」

こうして二人は急いで教室に向かった。

「今更だがなんでアイツは姫路を背負ったままだったんだ？」

二人は玄関に着いてからそのことに気づき、姫路は顔を真っ赤にしていたが、松也は気にすることなく姫路を連れて教室へと向かった。

第一話（後書き）

初めっから、やっちゃいました。

勢いで書きましたが、このあとどうしよう…

感想待ってます！

第二話（前書き）

更新が遅れてしまった…

たぶん、不定期更新になるのでよろしく

第二話

オレと瑞希は教室の前まで来たのだが、

「おい、瑞希。本当にここか？」

目の前には、廃屋と言っても差し支えないモノがあった

「と、とにかく入ってみませんか？」

姫路の反応がぎこちないが入ることにした

「「すみません。遅れました」」

『『『『『…え？』』』』』

クラスの奴らは俺と瑞希が入ってきて驚いていた。

いや、『オレと瑞希』にではなく、『瑞希』にだろう。

なんせ、瑞希は学年二位の才女なのだ。

「丁度良かったです。今、自己紹介をしているところなので姫路さんと鈴風くんお願いします」

「はい、姫路瑞希です。よろしくお願いします」

『はい、質問です』

「は、はい、なんでしょうか？」

『なんでここにいるんですか？』

聞きようによってはかなり失礼な質問だが

まあ、しょうがないだろう

「そ、その……振り分け試験の最中、高熱を出してしまいまして……」

『『『あぁ～』』』

なんか全員（一部をのぞいて）納得していた

『そういえば、俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに』

『ああ、化学だろ？　あれは難しかったな』

『俺は弟が事故に遭ったと聞いて』

『黙れ1人っ子』

『前の番、彼女が寝かせてくれなくて』

『『『異端者だ！』』』

『すみません！調子こきました！』

……予想以上のバカ共だ…

「次に鈴風くんお願いします」

福原先生がオレに呼び掛けた

（次はオレか、ここは一発やっとくか）

「え〜、鈴風松也です。一つ言っときますが姫路瑞希はオレの彼女で…

『『『異端者だ！』』』

カチャ（サングラスをはずす音）

ギロッ！！（男子生徒を睨む）

…もし手を出したら命の保障はありません。

…分かりましたか？」

『『『イ、イエス　サー！』』』

カチャ（サングラスをかける音）

（これでいいだろ）

「こ、これから一年よろしくお願いします」

「よろしく〜」

交際宣言を聞いて姫路は顔を赤くして後ろの席に向かい、松也もそのまま後ろに向かった

第二話（後書き）

主人公、一睨みでクラスメイトを黙らせるwwwwwww

いつまで効くのやら……

第三話

後ろの席に向かうと見知った顔があった

「よう明久、おはよう」

「おはよう、松也に瑞希ちゃん」

「明久くんおはようございます」

この男子生徒は吉井明久といい、オレと姫路の幼なじみであり

この学年きってのバカだ

……前までは

「二人とも残念だったね」

「お前こそ遅刻しなければ、もうちょっと上のクラス狙えただろうにな」

「あはは、いろいろあってね」

ちなみに、後から明久から聞いた話だと

道端にうずくまっていた女子を見つけ急いで病院まで運んでいき、

学校に向かったが遅刻してしまっただとか、

それを聞いた西村先生や学年主任の高橋先生などが再試験ができるよう掛け合っていたが、

教頭などが『これは校則である』ということで、結局再試験を受けれずにFクラスとなったわけだ。

「おいおい、明久がFクラス以外で行けるクラスなんてあるのか？」

明久と会話をしているとゴリラが話しかけてきた。

「誰がゴリラだ！」

「雄二、何叫んでるの？」

ゴリラもとい坂本雄二がいきなり叫んだことに明久は不思議そうな

顔をしていた

「なんだ雄二知らないのか？こいつ三学期になってから瑞希とオレで勉強を教えて、今はＤクラス上位くらいの成績はあるぞ？」

「全く、嘘はほどほどにしろよ」「いや、ほんとなんだけどな…」

「やっぱり信じてもらえないか…」

「あはは…」

松也が明久の成績が上がっていることを告げても雄二は信じてなく、明久は溜息をはき、姫路は苦笑いをしていた。

パンパン！

「はいはい。そこの人たち、静かにしてください」

「あ、すみま

バキィッ！　パラパラパラ……

せん？」

「え～。代えを持ってきますので、少し待っていてください」

気まずそうに先生は教室から出ていった。

…

……

……よし

「おい、ゆ『雄二、ちょっといい？』……」

松也が雄二を呼ぼおとしたところ、明久に先に言われてしまった

「なんだ明久？」

「ちょっと話があってね。廊下の方で話そう。松也も来てくれる？」

「あぁ、いいぞ」

明久達は廊下の方で話をすることにした

「……私はどうしたらいいんでしょう？」

おいて行かれた姫路は、一人寂しく待つこととなった

第三話（後書き）

明久の成績が上がっているｗｗｗ

成績は上がったが大丈夫だろうか？

第四話（前書き）

連続投稿です！

それではどうぞ。

第四話

「それで話ってなんだ？」

「この教室のことだけど」

「Fクラスか？想像以上に酷い所だな」

「Aクラスは見た？」

「まだだが…」

「あぁ凄かったな。あんな教室は見たことないな」

オレが見ていないないと言うと雄二が見たときの凄さを言った。

「そんなにか？」

「個人でエヤコンや冷蔵庫が使えて、座席はリクライニングシートだぞ？」

「……」

あまりの凄さに何も言えなくなった

「そこで僕からの提案、『試召戦争』をやってみない？」

「「戦争だと？」」

「うん！しかもAクラス相手に」

「・・・何が目的だ？」

「いや、え～と、

「嘘を言うな」

「正直に話せ」

あまりに酷い設備だからって、なんで、先にそんなこと言うの！」

「勉強に興味がないお前に設備なんて関係ないだろ」

「それにお前は『試験校だからこその学費の安さ』に惹かれたんじゃなかったか？」

「あーえーっとそれはその・・・」

雄二とオレが追求すると明久は戸惑い始めた

「瑞希のためなんだろ？」

「う、うん、そうなんだ」

「まぁ、オレも雄二に頼もうとしていたしな」

「気にするな。俺もAクラス相手に試召戦争をやろうと思っていたところだ」

「え？雄二も？」

「何でお前が試召戦争をやろうと思ったんだ？」

「世の中、学力が全てじゃないって証明をしてみたくてな。それにAクラスのための秘策も思いついた」

そういうと雄二は教室に入って行ったので松也と明久も教室に入った。

「坂本君、キミが自己紹介の最後の一人です」

「了解」

雄二君は先生に呼ばれて席を立ち、ゆっくりと教壇に向かっていった

「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは代表でも、好きなように呼んでくれ」

「じゃあ、ゴリラ」

「誰がゴリラだ！」

「じゃあ、ビックフット」

「誰がUMAだ！」

「「じゃあ…」」

「待て！これ以上何を言うきだ！」なかなかいいツッコミだ！

「……さて、皆に一つ聞きたい

不満はないか？」

『『『『『大ありじゃあっ！！！！！』』』』』

魂の叫びだった

「だろう？　俺だって不満だ。このクラスの代表として、大いに問題意識を抱いている」

雄二が同意すると、あちこちから不満の声があがり始めた

『いくら学費が安いからって、この設備はあんまりだ！　改善を要求する！』

『そもそもAクラスだっておなじ学費のはずだ！　あまりにも差が大きすぎる！』

『そうだそうだ！』

『理不尽だ！』

「みんなの意見はもっともだ。そこで、これは代表としての提案なんだが」

自信たっぷりの野生味溢れる笑顔で言った。

「Ｆクラスは、Ａクラスに対し『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う」

第四話（後書き）

ついに、遂に、戦争をしかけます！

楽しみにしてください

第五話

雄二の、いきなりの提案。

それに対し、クラスメイト達は非難し始めた

『勝てるわけがない！』

『これ以上設備が落とされてたまるか！』

『姫路さんが居たら何もいらない！』

（誰だ瑞希にラブコールを送ったのは？……ぶっ飛ばしてやる……

いや、それ以上の……）

松也が黒いオーラを出し始める

「そんな事はない、必ず勝てる。いや俺が勝たせて見せる」

『無理に決まってるじゃん』

『そう言われても何の根拠もないしな』

「根拠ならあるさ。

このクラスには勝つことのできる要素が揃っている」

雄二は自信ありげにそう宣言した

「それを今から証明してやる！

おい康太、いつまで姫路のスカートを覗いてないでこっちに来い」

「・・・・・・！！」

そういうと康太と呼ばれた青年は素早く立ち上がり首を横に振った

「はわぁ！？」

姫路は見られていた事に顔を朱くし、スカートを押さえた

「土屋康太　こいつがあの有名な寡黙なる性職者（ムッリーニ）だ」

そういうと康太（ムッリーニ）は首を横に振った

『馬鹿な……奴がそうだというのか？』

『だが見ろ！まだ証拠を隠そうとしているぞ……』

『あぁ、ムッツリの名に恥じない姿だ』

ムッツリーニとは、男子から畏怖と畏敬を女子からは軽蔑をもって言われている名だ

（瑞希のスカートを覗くとはな……後でＯ★ＳＨＩ★Ｏ★ＫＩが必要だな）

「それに姫路の事は皆その実力をよく知っているはずだ」

「え？私ですか？」

「ああ、ウチの主戦力だ期待している」

『そうだ！俺達には姫路さんがいる！』

『彼女ならＡクラスにも引けをとらない！』

『姫路さんさえいれば何もいらな（ドンッ！）ゲホォ！？』

いい加減腹が立ってきたので、殴り飛ばしといた

「それに木下秀吉だっている」

「ワシもか？」

『演劇部のホープだったか？』

『確かＡクラスに木下優子っていう姉がいたな』

「当然俺も全力を尽くす」

『坂本って小学校の頃『神童』とか呼ばれてたんだろ』

『確かになんかやれそうな気がしてきたぞ』

『これいけるんじゃないか！？』

教室のやる気が高まっていき

「それに吉井明久だっている」

一気に静まりかえった。

『誰だ吉井明久って』

『そんな奴このクラスにいたか？』

「おい雄二！何でそこで僕の名前をだしの！？せっかく上がった士気が台無しじゃない！だいたい僕は普通の人なんだから普通の扱いをしてよ！」

明久が文句を言うと、雄二が睨み付けてきた。

「そうか、知らないのなら教えてやる。

こいつの肩書きは『観察処分者』だ！！」

『それって、バカの代名詞じゃなかったか？』

『確か真のバカに与えられる称号だったハズだな』

「みんなひどいよ！」

明久はクラスメイトからの言葉に泣いていた

「あの～、観察処分者って何ですか？」

「瑞希、それは後で教えてやるよ。雄二、続けてくれ」

「あぁ、とにかくだ！俺達の力の証明するためにまずＤクラスを制圧しようと思う。　皆この境遇に大いに不満だろう？」

『『『『『当然だ！！』』』』』

「なら全員筆（ペン）を執れ！！出陣の準備だ！」

『『『『『おぉーーーーーッ！！』』』』』

雄二「俺達に必要なのは卓袱台ではない！Ａクラスのシステムデスクだ！！」

『『『『『うおぉーーーーーッ！！』』』』』

「おッおー／／／」

姫路は恥ずかしそうに腕を振り上げていた。

可愛いな～～

かくして、試召戦争の幕があがった

第五話（後書き）

いよいよ試召戦争がはじまります！

戦闘シーン、上手く書けるかどうか……

余話～キャラ紹介～（前書き）

遅くなりましたが主人公の紹介です

新しいことが判り次第、随時更新します

１１月１０日　更新

余話～キャラ紹介～

名前：鈴風　松也

読み：すずかぜ　しょうや

容姿：身長は雄二より少し低めで、黒髪にツンツンした感じの髪型、（禁書の土御門を黒髪にした感じ）瞳は金色。

クラス：F

趣味：サングラス集め・料理・ゲームや漫画

好きなもの（こと）：瑞希・母親・弟妹・明久・努力する人間

嫌いなもの（こと）：瑞希、母親、弟妹、明久を傷つける人間・努力する人間をバカにする人間

備考：いつもサングラスを掛けているが、外すとヤクザ顔負けの目つきをしている。

なので中学時代は、不良に絡まれ、子供には泣かれと散々なこととなり、明久の勧めでサングラスを掛けるようになった。家族構成：母親・自分・弟・妹の構成

成績：Bクラス上位くらいだが、振り分け試験の時に体調を崩した姫路を保健室に連れて行くため無得点扱いとなる

召喚獣：見た目は松也をデフォした形で破戒僧の姿。武器は錫杖で

ある

腕輪：後のお楽しみ！

余話～キャラ紹介～（後書き）

設定を考えるのも骨が折れるな…

第六話（前書き）

都合により、Ｄクラス戦の件は省略します

では、どうぞ。

第六話

「明久、宣戦布告してきたんだな」

あの後、明久が宣戦布告の使者となり、心配になったため一緒ついて行くことにした

案の定、下位勢力の使者に暴力を振るうという噂は本当で襲いかかってきたが、

サングラスを外し睨みつけると、大半の生徒が怯んだので、その隙に逃げてきた

「一応、今日の午後に開戦予定と告げてきたきたけど」

「じゃあ先にお昼ご飯だな？ほら明久、今日のだ」

「ありがとう！松也」

「？吉井のお弁当って鈴風が作ってるのね？」

島田は驚いたように松也に尋ねた。

「いや、これはお袋が作ったもんだが？」
「菊さんの料理はいつもおいしいね！」
「ふ～ん、そうなの」
「あぁ大体、去年の明久の食事は随分と酷かったからな～」
島田が適当に相づちを打った後、去年の明久の食事環境は酷かったといった
「いや……一応食べてたよ」
「あれは食べてると言えるのかの？」
「……お前の主食って水と塩だったろう？」
「失礼な！！きちんと砂糖も食べてたよ！」
「それは食べるとは言わんぞ明久」
「……正確には舐めるが正解」
「まぁ、飯代を遊びに使い込んだお前が悪かったからな……」
「しッ仕送りが少なかったんだ！」

「趣味にお金かけ過ぎるからだ……」

「ところで雄二よ。１つ気になったんじゃが、どうしてＡでもＥでもなくＤクラスなんじゃ？」弁当を食べて一休みした後に秀吉が今後の試召戦争のことについて聞いてきた

「色々理由はあるんだがＥクラスは相手じゃないからだ。姫路に問題のない今、正面からやりあってもＥクラスには勝てる。Ａクラスが目標である以上、Ｅクラスなんかと戦っても意味がないってことだ」

「？それならＤクラスとは正面からぶつかると厳しいの？」

「ああ。確実に勝てるとは言えないな」

「だったら、最初から目標のＡクラスに挑もうよ」

「初陣だからな。派手にやって今後の景気づけにしたいだろ？
それに、さっき言った打倒Ａクラスの作戦における必要な布石だしな」

「あ、あの～」

「ん？　どうした姫路」

「えっと、その。さっき言いかけたって

……松也くんと明久くんと坂本くんは、

前から試召戦争について話し合ってたんですか？」

「ああ、それか。　それはついさっき、姫路の為にって松也と明久に相談されて――」

「それはそうと！」

明久タイミングが悪いぞ。別にバレてもいいんじゃないか？

「さっきの話、Ｄクラスに勝てなかったら意味がないよ」

「負けるわけないさ」

明久を笑い飛ばす雄二

「お前らが俺に協力してくれるなら勝てる

・・・・・・いいか、お前ら。

ウチのクラスは――最強だ」

「良いわね。　面白そうじゃない！」

「そうじゃな。Ａクラスの連中を引きずり降ろしてやろうかの」

「……（グッ）」

「が、頑張りますっ。し、松也くんもがんばりましょう！」

「あぁ！当然だ！」

「頑張ろうね！松也に瑞希ちゃん」

「そうか。それじゃ、作戦を説明しよう」

そして、俺達は勝利のため雄二の作戦に耳を傾けた

第六話（後書き）

姫路の弁当の話がない！？

一体、どうなっていくんだか……

第七話

「先生！採点お願いします！」

「こっちもお願いします！」

「僕もお願いします！」

昼休みも過ぎて、いよいよDクラス戦が始まったが、松也と姫路と明久は振り分け試験を受けていないため無得点扱いとなっている

「松也と瑞希ちゃんは相変わらず速いよね」

「明久もずいぶん速くなったじゃないか？」

「そう？なら、うれしいなぁ」

明久は松也と姫路の解答の速さを見て賞賛していたが、明久も去年よりも解答する速さが上がっているというと明久は嬉しがっていた

「ですけど、本当にDクラスに勝てるんですか？」

「あの雄二が勝算もなしに戦争を仕掛けないだろう？」

「で、ですけど……」「まぁ、オレ達はあいつを信じて先ずはテス

トを終わらせとこうぜ」

「うん、そうだね」

Dクラスに勝てるか不安になっていた姫路を松也が落ち着かせ、テストは続いていった

ピンポンパンポーン！

しばらくテストをしていると放送を告げるチャイムが鳴った

《船越先生、船越先生》

「この声は須川くん？」

「雄二の作戦じゃないのか？」

オレと明久が不思議に思う間も放送が続いていく

《吉井明久が体育館裏で待っています》

「え？」

《生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです》

「須川あああぁあああぁ！！」

「吉井君、テスト中なので静かにして下さい」

明久の怒りの叫びが響いた

無理もない、船越女史は婚期を逃して焦りに焦った挙げ句、単位を盾に生徒に交際を迫るというこの学園で一、二を争う危険な先生なのだ

『おい、聞いたか今の放送！』

『ああ。Fクラスの連中本気で勝ちに来てるぞ！』

『あんなに確固たる意志を持っている奴らに勝てるのか……？』

遠くの方からDクラスの奴らが動揺する声が聞こえてきた

『皆、吉井の死を無駄にするな！』

『絶対に勝つぞー！』

『吉井、骨は拾ってやるからな！』

Fクラスの奴らの士気がうなぎ上りのようだ

その前にまだ、明久は死んでないんだがな

テストも受け終わり、

オレ達は雄二の所に来ていた

「シャァァアッ！」

雄二を目に捉えると同時に明久は襲いかかっていった

「お、船越先生」

……凄いな。

雄二が言った瞬間に明久が掃除用具のロッカーに入って行った

「さて、バカは放っておいて、そろそろ決着をつけにいくぞ！」

『おォ～～～～～！！』

いよいよDクラス戦も終わりに近づいてきた

ちなみに、ロッカーで怯えている明久をなんとか落ち着かせ、松也、姫路と共に戦場へと向かった

第七話（後書き）

なかなか物語が進みません…

第八話（前書き）

黒炉様

感想ありがとうございます

第八話

「下校している連中に上手く溶け込め！　取り囲んで多対１の状況を作るんだ！」

雄二の声が響く、どうやらゲリラ戦に持ち込むようだ

『そっちから、周り込め！　俺はこいつに数学勝負を申し込む！』

『なら、俺は古典勝負を！』

『よし、日本史で！』

Ｄクラスの連中を取り囲み、Ｆクラスのメンバーが次々に倒していく

『Ｄクラス塚本を討ち取ったぞ！』

一際大きな声が響き、ますます士気があがっていく

『援護に来た！みんな、もう大丈夫だ！　落ち着いて取り囲まれないように周囲を見て動け！』

よく響く声が聞こえた

Dクラス代表の平賀である

『Dクラス本隊だ、ついに動きだしたぞ！』

いよいよ初の戦闘の始まりだ

「準備はいいな、明久？」

「もちろんだよ！」

そう言うと明久とオレは戦場へと飛び出した。

「Fクラス撤退だ！分散して敵を攪乱しつつ後退するんだ！」

『逃がすな！　個人戦ならそうは負けない！　追いつめるんだ！』

雄二の退却命令にFクラス一同は下がり始めた

『本隊の半分はFクラス代表の坂本を追え！　残りは包囲されている者を救出だ！』

平賀の号令の下、あっというまに雄二を中心としたFクラス本隊はDクラスメンバーに囲まれてしまった

だがそのためにDクラス本隊に隙が出来てしまった

「いくぞ明久！」

「わかったよ松也！」

「「Fクラス　鈴風松也・吉井明久が近衛隊の六人に日本史で勝負を申し込む！」」

『え！？』

「「試獣召喚（サモン）！」」

『し、試獣召喚（サモン）！！』

明久の召喚獣は改造学ランに木刀という不良のような姿を

松也は、法衣を着て数珠を首からさげた姿は僧侶の様に見えるが

ボサボサな髪とサングラスが相まって、まるで破戒僧のような姿の召喚獣だ

そのすぐ後に点数が表示された

《Ｆクラス　鈴風松也　吉井明久　日本史　３１６点　１５９点
ＶＳ
Ｄクラス　近衛隊Ｘ６　平均９４点》

『なんだあの点数！？』

『本当にＦクラスか！？』

「よそ見してる暇は…」

「「ない！！」」

Ｄクラス生徒が驚いている隙に松也達は襲いかかった

『ちくしょー！なんであたんねんだ！？』

『とにかく代表はいったん下がってて！』

なかなか攻撃が当たらないことに焦りを感じたのか徐々に後退し始めた

だが、前に集中するあまりに後ろから来る少女に気づいていないようだ

『あ、あの…』

少し離れたところで、平賀の後ろから、申し訳無さそうに姫路が声をかけていた

『え？姫路さん。どうしたんですか？Aクラスはこの廊下を通らないし、今は戦争中なんで…』

『は、はい、それでですね…』

未だに現状を把握出来てない平賀と、もじもじと言いづらそうに姫路はいった

『え、Fクラスの姫路瑞希です。えっと、宜しくお願いします』

『あ、こちらこそ』

（おい、敵に挨拶してどうするんだ瑞希！？）

『その……Dクラス代表の平賀君に現代国語勝負を申し込みます』

『はぁ…、どうも』

『あの、えっと……さ、試獣召喚です！』

『え？あ、あれ？』

平賀は今更気付いたようだがもう遅い

《現代国語　Ｆクラス　姫路瑞希　３４９点
ＶＳ
Ｄクラス　平賀源二　１２９点》

『ご、ごめんなさいっ』

姫路は大剣を軽々と振り回し、平賀の召喚獣をあっさり斬り捨ててしまった

こうしてＦクラス対Ｄクラスの試召戦争は終了した

第八話（後書き）

甘甘なシーンなんて書けるんだろうか……？

アドバイスなどあったら教えて下さい

第九話（前書き）

前書きはなにをかいたらいいんだろうか？

第九話

Ｆクラス勝利という知らせにＦクラス生徒は歓声をＤクラス生徒は悲鳴をあげていた

「ま、まさか姫路さんがＦクラスだなんて……信じられん」

平賀は信じらんないという顔で膝をついていた

そんな平賀をクラスメイト達は慰めていた

「あ、その、さっきはすみません……」

違う方向から瑞希ちゃんも駆け寄って謝る

「いや、謝ることはない。全てＦクラスを甘く見ていた俺達が悪いんだ。まぁ、吉井君の成績が上がっていたのは驚いたが…

ルールに則ってクラスを明け渡そう。ただ、今日はこんな時間だから、作業は明日で良いか坂本？」

「いや、その必要はない」

平賀は今後の設備移動について聞いたが、雄二は断った

「え？なぜだ？」

「Dクラスの設備を奪う気はない、俺達の目標はあくまでもAクラスだ」

打倒Aクラス。これがオレ達の目指すものだ

「それは有り難いが……。それでいいのか？」

「勿論、条件がある」

「……一応聞かせて貰おうか」

「何、そんなに大した事じゃない。俺が指示をだしたら、窓の外にあるアレを動かなくしてもらいたい。それだけだ」

雄二が指したのはDクラスの窓の外にある室外機。但し、それはDクラスの物ではなく、Bクラスのものだ

「Bクラスの室外機か？」

「設備を壊すんだから、当然教師にある程度睨まれる可能性はあるだろうが、そう悪い取引じゃないだろう？」

「それは此方としては願ってもない提案だが、何故そんな事を？」
「次のBクラス戦の作戦に必要なんでな」
「……そうか。では此方は有り難くその提案を呑ませて貰おう」
「タイミングについては後日詳しく話す。今日はもう帰って良いぞ」
「ああ。有り難う。お前らがAクラスに勝てるよう願っているよ」
「ははっ。無理するなよ。勝てっこないと思っているだろ？」
「それはそうだ。AクラスにFクラスが勝てるかどうか…まぁ、応援するよ」
じゃあ、と手を挙げてDクラス代表、平賀源二は去っていった

「それじゃあ僕たちも帰ろうか」
「そうですね」
戦後対談も終わり、松也達は帰りの準備をしていた

「悪い、この後用事があるから先に行っててくれ」

「用事？なにかあったの？」

明久はどうやら忘れているようだ

「船越先生を説得しに行くんだよ」

「！？……（ガタガタッブルブルッ）」

「あ、明久くんしっかりして下さい！大丈夫ですから。ね？」

思い出したようで顔を青ざめ、体を震わせる明久。それを姫路が落ち着かせていた

「あとのことは俺に任せてくれ。瑞希のこと頼んだぞ？」

「……うん、そうするよ。

……松也、無事に帰ってきてね」

「あぁ、だって俺…

帰ったらお袋の手料理を食べるんだから！！」

「やめて！そんなフラグたてないで！って行っちゃった……」

果たして松也の運命は！

第九話（後書き）

まさかの死亡フラグ！

はたしてどうなるんだ！

第十話（前書き）

更新が遅れました

どうぞ

第十話

～明久　ｓｉｄｅ～

「おはよう瑞希ちゃん」

次の日、学校に向かってると瑞希ちゃんが先を歩いてたんで声をかけた

「あ、明久くん、おはようございます…」

？なんか落ち込んでるみたいだな

ん？そういえば、松也が見当たらない…

ま、

まさか……

「松也に何かあったの！？」

「はい実は今朝、松也くんのお家に行ったのですが……

お、お義母さん／／／の話では昨日、ボロボロになって帰ってきたからもう少し寝かせておくと言ってました／／／」

松也……

無事に帰ってこれたんだね……

ちなみに松也の母親と瑞希ちゃんの両親は二人の交際を認めており、家族公認というわけだ

「それじゃあ、松也は後から来るんだね？なら、僕たちは先に行こうか」

「はい、そうですね。」

こうして僕たちは学校に向かった

～side　out～

「……（チーン）」

今は回復試験が一段落ついて昼休みである

松也は昨日の疲れもあってか、机の上に倒れていた

「松也、昼休みだよ」

「……そうだな……」

「よし、昼飯でも食いに行くぞ！　今日はラーメンとカツ丼とカレーと炒飯にすっかな？」

「どんだけ食う気だよ……まぁ、オレも弁当忘れたし一緒に行くか」

「それじゃあ僕も」

雄二が学食に行こうとするといつものメンバーも一緒に行くことに

「あ、あの」

ゾワッ！！

その瞬間、明久と松也は背中に妙な寒気を感じた

「なんじゃ、姫路よ？」

「え、えっと。お昼なんですけど、私のを食べませんか……」
「もしかして弁当か？」
「はッはい、迷惑じゃなかったらどうぞ！」
「迷惑なもんか！なぁ、明久に松也…って何震えてるんだ？」
「な、なんででもないよね！松也！」
「あ、ああ、そうだよなな！明久！」
「おぬしらのその姿を見ても全く説得力がないのじゃが…」
明久と松也は顔を青ざめ、体を震わせており、見てる方は不思議がっていた
「せっかくのご馳走じゃし、こんな教室ではなく屋上にでも行くかのう」
「だ、だったらお前ら先に行っててくれ」
「ん？松也はどっか行くのか？」
「の、飲み物でも買ってくる。ぜ、全員お茶で良いよな？」
「ああ、良いぞ」

「なら僕も行くよ！！ひ、１人じゃ持ちきれないでしょ？」

「きちんとお前たちの分はとっておくよ」

「「お、おかまいなく！！」」

こうして明久と松也はお茶を買いに、姫路達は屋上へと向かった

「瑞希ちゃんのお弁当、美味しくなったのにね……」

「ああ、そうだな。美味しくはなったが、まだまだ慣れんな……」

「そうだね……」

実は中学時代に姫路の弁当を松也が食べたのだが、食べた瞬間に意識を失った

次に目を覚ましたのは、その日から三日後のことだった

姫路の料理が原因だと聞いた松也の母親が、試しに料理の”さしすせそ”を聞いたところ

答えはすべて薬品の名前だった

それで早速、姫路の料理を直そうと明久も加えて料理教室を開いたが
結果は惨憺たるものだった
松也の母親は某プロボクサーの様な格好で燃え尽きており、明久と
松也はそれから一週間寝込んでしまった
だが、苦労の末になんとか直すことはできた
ある『欠点』を残しては……

屋上に着くとみんな楽しそうに姫路の料理を食べていた

「おう、お前ら遅かったな」
「あんた達のはちゃんとあるからね」
「「ありがとう…」」
「皆さん、デザートもあるんですよ♪」
「デザートもか！」

「それはありがたいのじゃ」

「……ごちそうになる」

姫路はカバンからゼリーの入ったカップを取り出し、四人に渡した

だが、ここで明久と松也は驚いたような顔をした

「瑞希……これは前に作ったことあるか？」

「いいえ、初めてです」

初めてです

……はじめてです

……ハジメテデス

「全員、今持っているモノを下に置くんだ！！」

「は、早くみんな下に置いて！でないと大変なことに！？」

姫路の言葉を聞いた途端、二人は大声を出した

「何そんなに慌ててるんだ？」

「……まさか、独り占めにする気か」

「そうはいかないわよ」

「そんなにうまいのかの？」

みんなは止めているのはゼリーを独り占めにしたいのだと勘違いしているようだ

「じゃあ、お先に（パクッ）」

「……（パクッ）」

「あぁ！ゆ、雄二！」

「ムッツリーニ！」

「だから、何よさっきから慌て

バタン×2

ガタガタッ×2

て…って、え？」

倒れた音のした方を見ると体を小刻みに震わせて口から泡を吐いている

雄二とムッツリーニの姿があった

「ゆ、雄二！しっかりして！」

「ムッツリーニ！大丈夫か！とにかく島田！下の購買に行ってあるだけお茶を買ってこい！」

「わ、分かったわ！」

この光景に秀吉はカップを置き震えだし、姫路は何が起こったか分からないようだ

しばらくの間、屋上は騒がしかった

～余談～

「そういえばさ」

「なんだ？」

お茶も買い、屋上に向かっていると明久が松也に話しかけていた

「昨日、船越先生になんて言って諦めさせたの？」

「あぁ、そのことか…」

松也が遠い目をした

「最初に体育館裏に行った時『別の名前を出したのは恥ずかしかったからね！』なんて言って襲いかかれてな……

そのままリアル鬼ごっこをしたんだが、何とか落ち着かせて、今度いい生徒を紹介するってことで退いてくれたよ……」

「松也……ありがとう！」

明久は英雄に向かって心から礼を言った

第十話（後書き）

姫路の料理はやはり！！

はたして、その真相は！！

第十一話（前書き）

遂に姫路の料理が明らかに！！

第十一話

「二人とも大丈夫か？」

「あぁ、なんとかな」

「……死ぬかと思った…」

あの後、必至の救急処置によりなんとか二人は助かった

「あれはいったい……」

島田は未だに何が起こったか分からないようだ

「瑞希ちゃんは最初、料理ができなかったんだ」

「なんだ不味かったのか？」

「黒こげの方がまだマシだ。瑞希は何故か薬品を入れてくる」

「や、薬品だと！？」

この発言に一同は再度、顔を青ざめた

「お袋と明久のおかげで食えるくらいにはなったんだが、
”あるところ”だけは未だに直らないんだよな」
「なんだ？あるところって？」
「瑞希ちゃんはね、何故か初めて料理するモノに限って薬品を使うんだ」
「あぁ、しかもある程度教えたモノじゃないとこれは続くしな……
ちなみに毎回、注意してはいるが、目を離すとすぐに入れようとするんだ」
「本当にすみません……」
「……」
「こ、怖いわね瑞希は…」
「……恐ろしい」
「次からは気を付けるようにするかの…」
みんな今後は用心深くなるだろう
「それよりさ。次の作戦を話そうよ」

「そうだな」

「ところで雄二よ、次はＢクラスなのかの？」

「ああそうだ」

「……目標はＡクラスでは？」

「正直に言おう。どんな作戦でもうちの戦力じゃＡクラスには勝てやしない」

雄二らしくもない降伏宣言

まぁ、うちのクラスを見るとそうなるな

「それじゃあ、ウチらの最終目標はＢクラスに変えるって事？」

「いいや、そんな事はない。Ａクラスをやる」

「それってどういうことですか？」

「クラス単位では勝てないと思う。だから一騎討ちに持ち込もうと思う」

「一騎討ちに？どうやって？」

「Ｂクラスを使う。

下位クラスが負けたらどうなるか明久、知っているな？」

「え！？えーと・・・」

そこに姫路が明久にどうなるか説明していた

「つまりはBクラスならCクラスの設備になるわけだ」

「逆に上位クラスが負けたら設備が入れ替わるんだぞ？

覚えておけよ明久」

「うん、わかった」

「交渉内容については考えてある。俺に任せてくれ」

「じゃがな、それでも問題はあるじゃろう。そもそも一騎討ちで勝てるのじゃろうか？」

「そうだね。瑞希ちゃんがいることは既に知られているだろうし」

「それに関しても考えがある、心配するな。とにかくBクラスをやるぞ！細かいことはその後だ」

『了解』

「よし、明久」

「？」

「今日のテストが終わったらＢクラスに行って宣戦布告して来い。時間は明日の正午からだ」

「ヤダよ！雄二が行けばいいじゃないか？」

「いいから行ってこい。大丈夫だ……半分は」

「半分って何！？」

「明久、俺も行ってやるよ。確認しときたいことがあるからな…」

「確認？なんかあるのか？」

「な～に、ちょっと見かけただけだからな、確認が取れたら知らせるわ」

「あぁ、分かった」

こうして、昼休みは終わった

第十一話（後書き）

次回からいよいよＢクラス戦です

第十二話（前書き）

いよいよＢクラス戦開始！

第十二話

次の日の午後

「さて皆、総合科目テストご苦労だった。」

教壇に立ち、雄二が机に手を置いて皆の方を向いた

「午後からはBクラスとの試召戦争に突入する予定だが、やる気は十分か？」

『おおーーーー！！』

「さて今回は姫路に前線に出てもら、

姫路、しっかり頼むぞ」

「が、頑張ります！」

『『『『『いよっしゃあぁーーーーー！！』』』』』

《キーン！コーン！カーン！コーン！》

そこでチャイムが鳴り響いた

「野郎共、きっちり死んで来い！」

『『『『おッーーーーーー！！！！』』』』

「行ってこい！！目指すはシステムデスクだ！！」

『『『『うおぉーーーーーーーーー！！！！』』』』

みんな教室から出て行った

「瑞希がんばって来いよ！」

「あれ？松也くんはどうするんですか？」

「俺は教室で待機だからな」

「そうなんですか……」

松也が前線に行かないと聞き、姫路は落ち込みだした

ポンッ

「？」

ナデナデ

「大丈夫だ、もし瑞希がピンチになったらすぐに行くからな

だから落ち込むなよ」

「！…はい！がんばってきます！」

松也に頭を撫でてもらったためか、満面の笑顔で姫路は戦線へと向かった

「さて、これからのことでも考えるか？雄二」

「そうだな…Ｂクラスの代表が、”あの”根本ならな」

根本恭二

悪い噂しか聞かない奴だ、今回は警戒してあえて教室に残る事にした

「……何も起きないよな？……」

『失礼するぞ』

しばらく経つと誰かが現れた

俺は後ろの方におり、雄二が話し始めた

『誰だ？』

『Ｂクラスの使者で来た』

『使者だと？』

『ウチの代表が一時停戦協定を結びたいそうだ』

『……停戦協定か……分かった、応じよう』

『分かった、俺たちは視聴覚室にいるからな』

『あぁ、後から行くと伝えとけ』

Ｂクラス生徒は戻っていった

「雄二、なんで停戦なんて結ぶんだ？」

「姫路の体力を考えると明日に持ち越した方が都合がいいからな」

「なるほどな」

「それでだ、お前は一緒に来るか？」

「いや、俺は一応教室に残る。行ってる間に教室で待ち伏せされるって可能性もあるからな」

「そうだな…それじゃあ行ってくるわ」

「あぁ、気を付けろよ」

「お前もな」

雄二は数人連れて視聴覚室に向かった

『本当に大丈夫なんだろうな？』

『根本のことだ。大丈夫だろ』

『そうだな』

雄二達が教室から出て、しばらくすると数名の生徒が入って来た

松也は見つからないように掃除用具のロッカーに隠れている

『さっさと済ませようぜ！』

バキッ！　　バンッ！

そして、その内の一人が一台のちゃぶ台を壊すと同時に松也がロッカーから出てきた

『『！！』』

「見たぞ、見たぞ～♪え～と、ひぃ…ふぅ…みぃ……全部で5人か」

『な、なんで人がいるんだよ！』

『知るか！それより先生に知らされたらやばいぞ！』

『そうだな……恨みはねぇが大人しくしてもらう！』

そう言って一人が殴りかかってきた

「はい正当防衛、成立…っと！」

『ガハッ！』

松也はカウンターで逆に殴り飛ばした

「どうした？この程度か？」

『この野郎！！』

『なめやがって！！』

二人ほど怒りを露わにさせながら、松也に殴りかかろうとしたとき

「貴様等そこで何をやっている！！」

『『げ、鉄人！？』』

「……ちょうどいい」

西村教諭が教室に入ってきた

「鈴風、これはどうゆうことだ？」

「どうゆうことって、そこにいる奴等がここの設備を壊すのを見つけたんですが、

いきなり襲いかかってきたんですよ？」

「ほ～、そうなのか貴様等？」

西村教諭は振り向き、Ｂクラス生徒に尋ねた

『い、言い掛かりです！』

『確かに俺たちはここに入ったがが、それは戦争しているからだ！』

『なのに、そいつがいきなり殴りかかってきたんです！』

「と、向こうは言っているが？」

西村教諭は再度こちらを向いて尋ねた

確かにこちらは一人、あちらは複数、証言の数でこちらが負けている

現に自分達が有利と知ってか、西村教諭の後ろでイヤな笑みを浮かべている

が、

こちらには切り札がある

「ちょっと待ってくださいよ」

『『「??」』』

松也は教室の窓側の隅へと向かった

そして、そこにあるカバンから

「よっと」

『『『!!!』』』

ビデオカメラを取り出した

「これを見てくれますか?」

そこには、先程のやりとりが映し出されていた

「……さて、なにか言い訳はあるか?」

『ほ、補習はイヤだ!』

『助けてくれ！』

『お母ちゃーん！』

「……これは証拠と校則違反ということで預かるぞ」

「分かりました」

そうゆうとBクラス生徒を連れて行ってしまった

第十二話（後書き）

もっと、文章力を上げたい……

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8304x/

バカと色付き眼鏡と召喚獣

2011年11月22日02時52分発行